令和八年十二月号
《第百六十八号》

しろへび

宗教法人岩國白蛇神社

〒740-0017
今津町六丁目４－２
☎ 30－3333



師走（しはす）の祭典・行事案内

【月次祭】九時半
九日（水）
二十一日（月）

【大掃除】八時半
十三日（日）

【例祭】御案内
十六日（水）

【年越し大祓】三十一日（木）十五時

【昭和天皇御製】〈第一二四代〉
「伊豆須崎にて」

谷かげの林の春は浅くして風藤葛の実のあかあかと見ゆ

「第二十七回国民体育大会秋季大会」

まのあたり櫻島みゆる秋晴の広場にけふは人々つどふ

「ミュンヘンオリンピック大会」

朝もタもドイツに競ふ若人をテレビに見つつ思ひやるなり

（昭和四十七年）

【明治祭】十一月三日



未だに「文化の日」であることに無念さを覚えますが、今年も責任役員の方と「明治祭」を懇ろに斎行できたことは有難き事でした。

東京では十一月二十七日に参議院議員会館にて『明治の日実現！決起集会』が開催されるやうですが、政治家の方々には本気で法制化に邁進して貰ひたいと切望致します。

右の写真は明治天皇の御製十首を奏上してゐるところです。

【推薦図書】

『漢字文化圏の興亡』

～中国の限界、日本の前途～　九百円＋税

若山滋 著　新潮新書

万葉集、源氏物語、織田信長、夏目漱石・・・古来、日本人は漢字文化圏の中国、アルファベット文化圏の西洋と向き合い、独特の方法すなわち「和能」をもって大陸の文明を受容してきた。世界情勢と東西の力学が大きく変わりつつあるいま、私たち日本人が進むべき意道はいったいどこにあるのか。長年建築と文学の関係を探求してきた著者が、世界各地での実体験を織り交ぜながらこの国の前途を問う、画期的論考。

（本書紹介文）

『生き物の死にざま』

～はかない命の物語～　七五〇円＋税

稲垣 栄洋 著　草思社文庫

・・・未来を想像する能力を手に入れた人間は、「自分が死ぬ」という未来も想像できるようになってしまった。挙げ句の果ては、「人は死んだらどうなるのか？」とか、「人は何のために生まれてきたのか？」とか、考え出す。そして、「生きるのがつらい」とか、「死んで楽になりたい」とか、とても生き物とは思えないようなことを言い始める。そんな生き物は他にはいない。そんなことを考えるのはヒトだけだ。すべての生き物は、「今」生きている。大切なのは「今」である。今、命があるのだから、その命を生きればいい。ただ、それだけのことである。・・・

（本文から）





本居宣長『直毘霊』を読む（二十）

然るを、やや降りて、書籍といふ物渡り参ゐ来て、其を学び読む事始まりて後、其の國の手風をならひて、やや万づのうえに交へ用ゐらるる御代になりてぞ、大御国の古の大御手風をば、取り別けて神の道とは名づけられたりける。そは、かの外つ国の道々に紛ふがゆゑに、神といひ、また、かの名を借りて、ここにも道とはいふなりけり。

神の道としもいふ所由は、下に委曲らかに説く。（続く）

【現代語訳】

そうであるが、少し時代が下がつて、書物といふものが輸入されて、それを学習するために読むことが始まつてから、其の國の風習を真似するやうになり、いくらかいろいろの事柄に関して、「日本の風習と外国のそれとを」混ぜて採用される時代になつて、尊敬するこのお国の昔の素晴らしい風習を特に取り立てて神の道といふやうに名づけられたのであつた。それは、あの外国のいろいろな道と間違へられるために、神といひ、また、あの名称を借りて、こちら（日本）でも道といふのであつた。

神の道といふやうにいふ理由は、以下に詳細に解説する。（続く）



【参拝記念画】第六弾の授与始まる

美術家・三桝正典先生の記念画第六弾を授与してゐます。天井画、巳年の大絵馬の制作者である三桝先生の手書きによる記念画（Ａ６）を初穂料二千五百円にて限定五十幅授与してゐます。



【令和九年初詣の駐車場の案内】

初詣に車でお越しの場合、駐車場は左記の臨時駐車場をご利用ください。

※期間は、元旦から三日（日）と九日（土）から十一日（月）の間となります。

ご利用は元旦から警備員の指示に従ってください。



神宮カレンダーを千円で授与してゐます。

数に限りがありますので、お早めに社務所にてお受け下さいませ。



神宮大麻（お伊勢さまの御札）を授与してゐます。（一体千円）



今年度の（令和八年度）の御札もお預かりして、お焚きあげします。社務所に直接にご持参ください。

年末年始のおしらせ

旧年の御札・お守りのお焚きあげは社務所で受付してゐますが、一月九日までにご持参願ゐます。

尚、正月飾りの橙（ダイダイ）や金属等は取り外してお持ちください。

九日以降は、他のお焚きあげ施設のある神社へお願ひします。